

アートによる心の応援チーム

ARTS for HOPE

Activity Report

活動の軌跡

March 2011 ~ 2013



アートによる心の応援チーム

ARTS for HOPE

Activity Report

活動の軌跡

March 2011 ~ 2013



Preface

ごあいさつ

アートを明日の希望に

東日本大震災からもうすぐ3年。

延々たる瓦礫地帯を前に、何をなすべきか、どこへ向かうべきか、自問しつつ無我夢中で始めた活動は300回を重ね、物資とボランティアを乗せた車の走行距離は地球1.4周分を超えた。岩手、宮城、福島各県沿岸部をひた走り、自分たちの目で確認した過酷な被災状況。自分たち自身で探した行くべき場所。それらを引き続きフォローしてもらうために、3県各地在住リーダーと支局を設け、現地主導の活動も展開されるまでになりました。一面泥色の被災地に、希望が射す色を届けたい！アートの感動で心に命の輝きを灯したい！そして明日を創る創造力を運びたい！そんな思いだけを羅針盤に、まっしぐらにきたARTS for HOPE。しかし、応援し続けてくださった支援者の皆さまのお力なしには到底走り続けることはできませんでした。あらためて、深く、深く、感謝を申し上げます。そして私たちとともに笑いや感動を共有してくださった温かい東北の皆さま、素直なこどもたちとの運命の出会いに、心から感謝申し上げます。東北を復興することは、私たちの国を復興することだと思います。まだ先に長く続く復興への道を、人々の揺れる心と繰り返し触れ合いながら、地域とともに歩む活動を、これからも皆さまとともに続けていきたいと思います。どうか私たちと一緒に力を合わせてくださることを切にお願い申しあげます。

ARTS for HOPEの活動をいま、あらためて振り返り本書にまとめることで、私たち自身も思いを新たに、東北に寄り添う活動の再出発点にしたいと考えています。同時に、小さな支援チームが駆け抜けたアートによる復興応援活動の一つの記録を、皆さんと共有させていただければ幸いに存じます。本報告書の発行にご協力くださいました皆さま、本活動にご支援、ご協力くださいましたすべての皆さんに心より感謝申し上げます。

2013年12月

ARTS for HOPE代表

高橋雅子



たかはしまさこ

アーティスト・アートプロデューサー・NPO Wonder Art Production, Hospital Art Lab代表。米国州立Western Michigan University芸術学部卒。アメリカ現代美術のギャラリーを経て、美術館 Petit Musee のシニアキュレーターに。美術展覧会の企画やワークショップ、美術館運営に携る。1999年にWonder Art Production、2004年にHospital Art Labを設立。展覧会オーガナイザーとして世界のアートを紹介するほか、美術館や博物館における子どもの情操教育プログラム、医療現場や地域社会をステージにしたさまざまなアートプロジェクトを手がける。主な企画展覧会に「アマゾンの侍たち人間・自然・芸術」(2007年、川崎市岡本太郎美術館)「Street Art in Africa」(03~05年、国立民族学博物館、福岡市博物館他)など。病院に温かさを運ぶホスピタルアート活動は、全国と世界の病院77カ所にわたる。東日本大震災後の11年3月20日にARTS for HOPEを発足。

Contents

目次

ごあいさつ—アートを明日の希望に	2
数字でみるARTS for HOPEの取り組み	3
活動年表	5
ARTS for HOPEのプログラム	
パッピードールプロジェクト	7
パッピーペインティングプロジェクト	8
パッピーフラワープロジェクト	9
アートキャンプ「森のアート海のゲイジュツ」	10
アートリノベーション	11
スペシャルプロジェクト／わくわくプロジェクト	12
スペシャルサポーター	13
特別寄稿「アートを通じて」	
森 郁子(公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)	14
高見のっぽ(俳優／作家／歌手)	16
伊藤正樹(公立相馬総合病院小児科医師)	21
松井瑞子(聖路加国際病院形成外科医長)	23
参加者、ボランティア、サポーター、支局スタッフの声	15, 17-19, 22, 24, 28
支援の輪	25
今後に向けて—子どもたちの成長とともに	27
広報の記録	29
ARTS for HOPEについて	30

数字でみる ARTS for HOPEの取り組み

Our Activities in Figures

2011年3月から2013年12月現在までのプログラム活動実績

ARTS for HOPEは発足以来、各地の子どもの施設や仮設住宅を巡回し、「Happy Doll Project」(おしゃべりしながら願いを込めた人形をつくるプログラム)や「Happy Painting Project」(思いっきり色遊びを体現するプロジェクト)を中心に、地域やボランティアのご協力も得ながら、さまざまなアートワークショップやイベントをお届けしました。

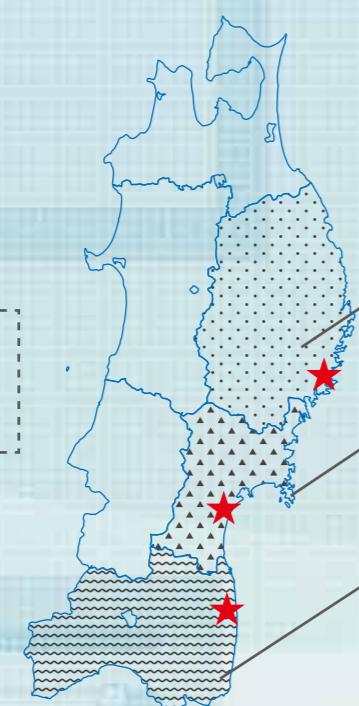
プログラム実施回数 **303** 回

避難所、仮設住宅、小学校、幼稚園、保育園、児童館、児童クラブ、病院などを巡回

新たに誕生した
現地活動拠点★

3 力所

岩手、宮城、福島に支局(P30)を開設。
現地スタッフによる
プログラム運営がスタート



地域別の実施回数は、

岩手県 **48** 回

宮城県 **139** 回

福島県 **105** 回

その他 **11** 回

活動報告レポート配信数

171 回

PDF版活動報告レポートを
日々メールで配信

活動を実施した地域
8 県、37 市区町村

東北各所を訪問。
同一地域での継続実施も重視

プログラム総移動距離

5万5570.9 km

地球
約 **1.4** 周分
(子午線の周囲)



日本
約 **3** 周分
(本土域の海岸線)



スカイツリー（高さ）
約 **8万7651** 個分



富士山（高さ）
約 **1万4717** 個分



プログラム参加者

のべ **1万3946** 名

0歳から90歳代まで、年齢、男女を問わず
多くの方が303回のプログラムに参加



ボランティア参加

のべ **550** 名

国内は北海道から沖縄まで、
海外からも参加。

ボランティア登録は **108** 名

Happy Doll Project

ARTS for HOPEのプログラム 1

ハッピードールプロジェクト 



願いを込めたマスコット「ハッピードール」をつくるて楽しむプロジェクト。カラフルで温かみのある布を使っておしゃべりしながら手を動かすと、会話も弾み、気持ちがリラックスします。子どもから高齢の方々まで、年代も性別も問わず誰でも参加できることも大きな特徴。特に仮設住宅では大好評で、継続的に訪れている集会所がいくつもあります。ユーモラスでありながら、人の心を打つハッピードール。自由な発想で生まれる作品の背景には、それぞれの思い、それぞれのストーリーがあります。もともとは全国の病院で2006年から行っているプロジェクトで、これまでに日本各地とアメリカの病院、計50カ所以上を巡回しています。



Happy Painting Project

ARTS for HOPEのプログラム 2

ハッピーペイントイングプロジェクト 



心も体も解放して皆と一緒に大きなキャンバスに絵を描くプロジェクト。夏場は裸足になり、手も足も絵の具でいっぱいにして思い切り色遊びを楽しみます。なかでも人気があるのはシャボン玉を使ったプログラム。子どもたちの目に映るシャボン玉の世界が、豊かな色彩で表現されます。長く張り巡らせたビニールシートに絵を描くハッピーペイントイングも好評です。まるで空に向かって描くような不思議なキャンバスに、子どもたちの感性が羽ばたきます。いつもとちがう特別な空間のなかで、自由にのびのびアートを楽しむ時間。病院の患者さんや障がいを持つ子どもたち対象のプログラムも行っています。



Happy Flower Project

ARTS for HOPEのプログラム 3

ハッピーフラワープロジェクト 



「希望の花を咲かせよう!」をコンセプトに、たくさんの人の手でつくられた花の作品で空間を彩るプロジェクト。作品には復興への願いと東北に向けた応援メッセージが込められています。2012年3月、福島県相馬地方の伝統行事「相馬野馬追」の聖地く雲雀が原祭場地で第1回目を開催。2013年に同地で開催した「ハッピーフラワープロジェクト」には、全国から2600点を超える作品が集まりました。大型のお絵かきキャンバスを設置して子どもたちと絵を描いたり、ゲストミュージシャンを招いたライブで大合唱したり、地域で楽しんでいただけるイベントとなりました。



ARTS for HOPEのプログラム 4

Art Camp

アートキャンプ「森のアート海のゲイジュツ」 

夏休みを利用して、東北の子どもたちのリフレッシュキャンプ。自然物を探集してアート制作をしたり、山登りや沢登りに挑戦したり、さまざまな体験を通して東北各地の子どもたちが交流します。2012年から13年にかけて、計5回のキャンプを開催。気仙沼、石巻、登米、東松島、塩竈、仙台、亘理、福島、郡山、いわき、相馬、南相馬など、17市町村から集まった子どもたちの2泊3日の共同生活は、かけがえのない思い出深いものになりました。プログラムで訪れた仮設住宅や小学校、児童クラブで出会った子どもたちどうれしい再会を果たすことも多く、彼らの成長した姿に会える楽しみも格別です。



Art Renovation

ARTS for HOPEのプログラム 5

アートリノベーション R

Special Project Wakuwaku Project

ARTS for HOPEのプログラム 6 & 7

スペシャルプロジェクト S & わくわくプロジェクト W



「自分たちのまちを明るくしたい!」「まちの復興に携わりたい!」—そんな子どもたちの思いから始まったプロジェクト。自治体の協力のもと、老朽化した公園の遊具や外壁をリデザインし、地域の皆さんと一緒に明るく塗り変える活動を取り組んでいます。

ARTS for HOPEの運営母体、Wonder Art Production(WAP)では、東京都立駒沢公園のアートリノベーションを2003年から毎年手がけてきました。また、医療施設の環境を温かいものに変えるホスピタルアート活動の一環として、埼玉県済生会栗橋病院をはじめとする病院で、先生や患者さんとの共同作業を通して、アートによる明るい環境づくりのお手伝いをしています。そうした経験をいかしたプログラムです。

季節や対象に合わせ、また訪問先や連携団体のリクエストに応じて、通常シリーズをカスタマイズした「スペシャルプロジェクト」を実施しています。これまでに、地域のお祭りや、クリスマス会等の四季折々の催し、地元商店街のイベント等で、多様なスペシャルプロジェクトをお届けしてきました。ご依頼をいただく方々や団体とのコラボレーションも増えています。特別ゲストとしてアーティストを迎えてプログラムを行う「わくわくプロジェクト」は、これまでに俳優の役所広司さんや画家のMAYA MAXXさんをはじめ、多くのアーティストやミュージシャンが参加しています。WAPが行う病院での活動も連携プログラムとして実施しています。



役所 広司 (俳優)

ARTS for HOPEのスタッフ、またボランティアの皆さん、皆さんはあの日以来ずっと走り続けていますね。東日本大震災から2年半が経ちました。

やくしょ こうじ

1956年長崎県生まれ。俳優・仲代達矢主催の無名塾出身。83年NHK大河ドラマ「徳川家康」で織田信長役を好演し、脚光を浴びる。85年故伊丹十三監督の「タンポポ」に出演。88年日本・スイス合作映画「アナザーウェイ D 機関情報」で映画初主演。96年「Shall weダンス?」「眠る男」「ジャブ極道」で国内の14の映画賞で主演男優賞を独占。97年「うなぎ」、2001年「ユリイカ」など国際映画祭への出品作品も多く、国際的にも高い評価を受ける。その後も主演映画「十三人の刺客」「最後の忠臣蔵」などが公開され、12年紫綬勲章を受章。今後も中島哲也監督作品「渴き」、小泉堯史監督作品「囁の記」などの主演作が公開予定。日本を代表する俳優として活躍している。



被災地の復興、再生は、想像を遥かに超えたいろいろな問題を抱え難航しているようです。

現場で活動されている皆さんは、それを肌で感じてらっしゃることと思います。

皆さんの活動は、生活を支えるインフラ整備などとは違い

はっきりと結果が目に見えるものではありません。

しかし、皆さんがつくる「自由に自分を表現する場」は、

特に子どもたちの心のケアに役だっていると信じています。

心の傷を負った子どもたちが心身ともに健康に育っていく手助けのため、

これからもがんばって走り続けてください。

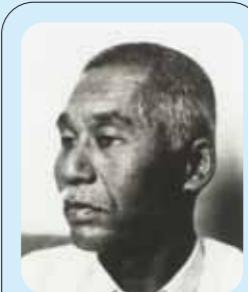


ARTS for HOPEの活動に参加している子どもたち、

高齢者の皆さんのかわいい笑顔にはいつもこちらが励まされています。

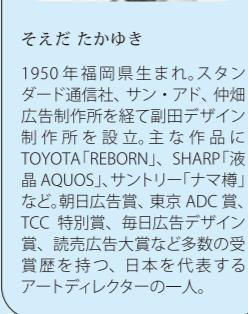
微力ながらこれからも皆さんを応援していきたいと思います。

From Special Supporters スペシャルサポーター



副田 高行 (アートディレクター)

東日本大震災が起り、茫然自失の日々を送っていた折に、「ARTS for HOPE」と出会った。アートディレクターとして、お手伝いできることはなんだろうと考え、ロゴタイプとポスターなどの制作をしてさしあげた。震災で心に大きな負担を抱えた子どもたちにとって、「ARTS for HOPE」の活動はとても大きな励ましになると思う。



そえだたかゆき

1950年福岡県生まれ。スタンダード通信社、サン・アド、仲畑広告制作所を経て副田デザイン制作所を設立。主な作品にTOYOTA「REBORN」、SHARP「液晶AQUOS」、サントリーナマ樽など。朝日広告賞、東京ADC賞、TCC特別賞、毎日広告デザイン賞、読売広告大賞など多数の受賞歴を持つ、日本を代表するアートディレクターの一人。



Special Message Through the Arts

特別寄稿

アートを通じて

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン／東日本大震災復興支援事業部 プログラム・スペシャリスト

森 郁子



復興を生きる毎日だから、「創作する遊び」を大切にしたい

2011年3月、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(SCJ)が宮城・岩手県の計19カ所の避難所に設置した「こどもひろば」には、毎日子どもの姿がありました。通い慣れた学校が突如生活の場となり、多くの子どもたちが深刻な事態を理解し、ことの成り行きを見守っていたことは、いまでも鮮明に思い出されます。当時7歳の女の子が週末は遊ぶけど、今日は無理。だって、みんな悲しそうだから」と話してくれました。子どもが子どもらしくいられる時間、安心・安全に遊べる場をつくり出すことが求められていました。

SCJは2012年秋より、宮城県石巻市で「地域の遊び場づくり」事業を開始しました。0~6歳の子どもとその養育者が定期的に集まり、子どもの発達に即した幅広い遊びに出会いうこと、養育者同士のつながりをつくることがねらいです。本事業では、遊びを「からだを動かす」「想像する」「コミュニケーションを用いる」「手をつかう」「創作する」の5つに大別し、日常にある何気ない遊びを乳幼児期の発達に着目しながら捉え直す活動を心がけました。

各「遊び」のプログラム実施は、専門的な団体へ協力をお願いしていましたが、「創作する」遊びのパートナーを探しているときにお会いできたのがARTS for HOPE代表の高橋雅子さんでした。特に「創作」をテーマにした回では、伸び伸びとした表現活動や、たくさんほめられることを大切にした活動にしたいと考えていました。そのため、この分野での専門性と知見が豊

富なARTS for HOPEさんにぜひお願いしたいということになりました。

当日は「色」や「点と線」を中心にしたシンプルなプログラムをご提供いただき、月齢にかかわらず新しいものが生まれる瞬間を大切にした活動になりました。指や足の裏に絵の具をつけて絵を描いたり、色が混ざる過程、線が重なる光景をじっと観察してみたり、子どもそれぞれの楽しみ方がありました。

一方、自分を解放して子どもたちと絵を描くのは、養育者やスタッフにとっても、楽しいひと時となりました。日々の疲れで閉ざされた気持ちを解放する感覚は、非常に清々しいものでした。また、「普段は戦いっこばかりで、お絵かきなんて滅多にしないんですけど…」と、この日アーティストに変身した息子の姿に感心しているお母さまもおられました。忙しい毎日では、「片づけが大変」「絵の具を舐めないか心配」などの理由から機会が少ないお絵かきも、たまには汚れていい服を着て集まり、安全な画材を使って、子どもが思う存分創作に没頭する大切さを実感できる有意義な時間となりました。

さらに、今回活動をご一緒に親子のコミュニケーションの変化を確認することができました。震災当時、子どもの遊びには、震災の影を感じさせることもあり、その対応に大人が戸惑うこともあります。また、色使いや描き方等から震災の影響を読み取ろうと気にかける傾向も見受けられました。しかしながら、本来、子ども



もり いくこ

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン／東日本大震災復興支援事業部 プログラム・スペシャリスト。2011年3月からは東北における支援活動に主に従事。継続的に、子どもの遊び場づくりにかかわっています。そのほかポジティブ・ディンプリン(前向きなしつけ)の日本国内の普及活動を担当。保育士。

永田 千代美

(ボランティア／東京都在住)



私の母の故郷は福島県相馬市で、被災した兄や親戚からは支援や復興に関する率直な意見を聞いていました。自分の得意分野はアートですが、どのようなかたちで支援につながられるのか、つなげてもよいのかわかりませんでした。偶然見つけた ARTS for HOPE (AFH) のウェブサイトで、母の家へ行く日程と同時に南相馬の公園でのアートリノベーションを知り「少し閉鎖的な人や保守的な人もいるけど、復興にアートは必要とされているのだろうか」と悩みながらも、参加しました。

地元の人たちはどう思うのかな、子どもたちと仲よくなれるかな…なんて心配していましたが、いろんな心配や壁をアートは超えていくものだってことを、震災以降私はすっかり忘れていました。一緒に塗った男の子は塗りながら少しづつ本音を呴いてくれました。山や海へ行けなくなったこと、友だちが減ったこと、このまちが嫌いじゃないってことを笑顔で教えてくれました。一緒に道具に色を塗るという作業が、彼の心を自然に開いたのかもしれません。協力していた地元の大人たちも笑顔っていました。震災以降いろんな言葉を耳にして、アートの力を見失っていた自分的心も笑顔になっていました。

アートの力は、かかわる人間によって、よくも悪くも変わると思います。AFHは現地の方々の視点に立ち、アートの力で未来へつないでいこうとしているからこそ、現地の方々にもボランティアにも、笑顔で未来へ進んでいける強さを与えていました。

高橋 里実

(宮城支局スタッフ／宮城県仙台市在住)



必要な？アート

アートの意義をデータで提出できたら、皆は納得するのだろうか。

たぶん、多くの人は、自分が夢中でものをつくりあげている時間のことを、数字やグラフで説明なんかしたくはないと思うんだ。数値で評価が決まる。その方が進めやすい世の中になっていることは知っている。でも、そのまわりに必ずあるモヤモヤを、もっと大切にしないと、本当はいけない。心の底じゃわかっているのに、昨今のわれわれはそれを怠りがちになっているんじゃないのかな。語り出すのは、20年先、30年先、もしかするともっと先の時代かもしれないけれど。私たちは、この大震災という未曾有を味わったし、子どもたちは、この経験を忘ることはないと思う。針1本糸1巻なかった避難所で、みんなで寄り添い、世間話をしながら、へんてこな人形をつくりあって、笑い合うこと。自分の体よりでかい紙の上に転がって、絵の具だけになりながら、色あふれくる画面をこさせてゆくこと。

「知ってた？ひとつてね、美しいがないと、死んじゃうんだよ。」

土屋 昭子

(宮城県立こども病院保育士／宮城県仙台市)

「大きな紙に絵を描いてみる？」「ええ！？」「こんな、こんな、大きい紙？」と両手を広げて紙の大きさを確認する子ども。「みんながやるんなら行こうかな」「一緒にやってくれるんだったら行ってみる」など、保育士の誘い文句に対する反応はさまざまでした。子どもたちは遊びのなかで自分の感情を表出するということは、日々の保育活動のなかから経験していることです。私たちの立場としては、遊び（活動）を何かの目的の手段として使いたくないという考えはあります。それとは別に、遊び（活動）が感情の表出を促し、子どもたち自らが言葉で表出する場面があります。

青木 理絵

(上真野児童クラブ指導員／福島県南相馬市)



南相馬市は東日本大震災で地震、津波、原発事故の被害に遭いました。原発事故で市内一部が警戒区域（立入禁止区域）になるなど、子どもたちは一時的または長期的に避難し、生活が一変しました。小学校は、震災から約1ヶ月後の4月下旬に無指定地域に集約されて再開されました。児童クラブも同じ小学校内に開設されました。当時は放射線の影響を考慮して窓も開けられないなかでの放課後活動でした。

ARTS for HOPE (AFH) と私たちとの出会いは、それから間もない5月27日でした。室内で何かとがまんをしながら過ごしていた子どもたちにとって、真っ白い大きな紙を床いっぱいに広げ、思いっきり絵の具やクレヨンで思い思いの絵を描いていくことは、それまで心の奥にしまっていた「好きなことをしてもいい」という感覚を思い出させてくれるものでした。久しぶりの泥遊びにも似た絵の具の手触りに、洋服を汚すことも気にせず夢中になったことを思い出します。それからたびたび一緒に遊ぶなかで、子どもたちの絵と心が、5月よりは7月、7月よりは11月と再生していることを教えてくれたのも AFH の活動でした。

子どもたちが活動を通して解放感や充実感をつかんでいくこと。私たちを見守る大人が、子どもたちのアート活動を通してその子の新たな面を発見できることや、より深く理解できること。それらがその後の子どもとのかかわりにいかされていることを感じています。

八代 進一

(ボランティア／劇団花組芝居所属俳優)



私は普段、舞台を中心とした俳優活動を行っていますが、舞台関係者のみならず、芸術活動を行う者は皆、この大震災の被災者の方々、地域に対して「芸術ができることは？」という問いを、いまなお突きつけられていると思います。そもそも「芸術」というものの定義もそれぞれですが、私が行ってきた、あるいは多くのプロの表現活動というものは、結果主義、作品主義です。ARTS for HOPE (AFH) の活動は、絵を描くことやものづくりそのものの喜び、楽しさの機会の提供であって、もちろんできあがった作品の質が高い方がいいですが、結果的にできあがった絵や人形がメチャクチャでもそれはそれで楽しい、という種類のもの。結果よりもその過程に重きを置いた芸術活動。ゆえに、それが目に見える経済効果や復興に、にわかにつながるかどうかはわかりづらいかもしれません。人間のあらゆる活動の根本である「心の豊かさ」につながる、とても本質的な活動だと思います。

AFH の活動に接することで、自分が普段やっていることの意義をあらためて認識できました。「芸術ができるることは？」という問いは、いまや私にとって答えを重要としません。芸術とは、ただそこにあるだけではらしい。そしてどこにでもあるものだと考えるからです。

「知ってた？ひとつてね、美しいがないと、死んじゃうんだよ。」

吉澤 伸也

(宮城支局スタッフ／宮城県仙台市)

今回のハッピーカラープロジェクトでもそれを見ることができました。多児と離れた場所で一人（自分）だけのために用意された紙に黙々と絵を描く学童児。周りの大人は絵の具を補充したり使用する色の準備などをしたりして、その子が十分に描けるような配慮をしていました。描き終わる大人が「何を描いたの？」と聞くとその子は「でんしゃ。もう終り！」と答えていました。イベントの5日ほど後に病棟前に展示してある絵を見ながらその子は、震災の時の出来事を静かに話し始めました。最後に「今度地震がきたら、これで（これに乗って）逃げるんだ」と話してくれました。その子から震災の話をじっくりと聞いたのは初めてでした。

Voices

Special Message Through the Arts

特別寄稿 アートを通じて

高見 のっぽ（俳優／作家／歌手）



君イ、そりやちょっと大変な仕事を選んでるんじゃない。君イ、大丈夫か？」「何言ってるんですか。大丈夫に決まってますよ！」おおむね、少々の怒りを含んだ声が返ってくるが、それで私は安心するのである。近頃は大きくなったりヒトの年齢が五十を超える。「いや、もう、あんなに楽しそうだから、自分でやってみたらエライのナンノ」「私だって難しかったんですよ。それに私はケチのつけようもないブキッショだつたんだからね」「うそ？！」「ほんとですよ、ゴメンね」「あははは、聞いちゃった、聞いちゃった、あははは」私はあの当時、テレビの中で1人で仕事をしていました。しかし向こう側にも同じ仕事に悪戦苦闘する友人がいたのだ。あの3年間がこんな友情をもたらすものとは思っていなかった。と言ふことで、福島から戻った高橋さんにたずねてみた。

創造力のたね

この原稿を書きながら、ちょっとたずねたいことがあったので、ワンダーアートプロダクションの高橋雅子さんに連絡したら、福島に行って留守とのことだった。震災後、きちんと彼の地を訪問されているのは承知だったが、あらためて「震災からもう何年になるのかな、ちゃんとやるんだなあ」と、東京で何もしないでのんびりしている自分をちょいと後ろめたく思つたりした。

いまから50年前、あの頃はアートなんて言葉は使わなかつた。私が案内を務めたのは「幼児向けの造形番組」と銘打たれたテレビ番組だった。造形と聞いて、そういう美的センスにまったく欠如を自認する私は尻込みした。その私にプロデューサーが、かあるく演説した。

「人間には創造力でのものが必要です。幼児にその創造力の萌芽を促すには種々の方法があるでしょう。さまざまな芸術、美術、そうですその美術をちょいとわかりやすく〈造形〉を切りとつて……ええと、これは工作番組ってことなんですね。なあに心配することはありませんよ。ああた、いくらなんでも鉄と糊ぐらいは使える

でしょ」「ハア……」

番組は25年ほど続いて、そして終了してからもう20年になる。終了した当初、いくらかの感慨めいたものがあったが、私は私の番組がどんなものだったかなんてことには一切思いがいかなかった。大体が、「児童向け番組」なるジャンルなのだから、まあお客様の年齢を4・5・6歳とすれば3年も経てば私の番組から離れていてそれでオワリー。ところがそうじゃなかった。

テレビ局から外に出る機会が多くなった。すると私の前には往時は小さいヒトで、そしていまは大きくなったりヒトが続々とやって来た。

「ああ、ノッポさん、僕がちゃんとデザイナーになれたのはノッポさんのおかげです」「ああ、のっぽさん、ぼくは家具職人でーす。腕のいい職人さんでーす」「マンガ家志望で、また雑誌のイラストを描いてます」

彼らは案外に誇らしく気に私に報告するが、私はなんとなく責められたものを感じる。

いきいきと笑顔になり、その笑顔で大人も笑顔になるので、今後も続けていきたいと思うんです。何より、子どもたちには創造力を握んでもほしい！すべてを生みだす源だと思うので。

のっぽ う~ん。なかなかできませんよ。私などはできません！

高橋 あら？ ノッポさんも東北で活動なさっていらっしゃいますよねえ。宮沢賢治さんの作品のひとり芝居を花巻や青森で。小さいヒトや大きいヒトに向けて、伝えたいメッセージもいっぱいのせて…？

のっぽ あつ！いやいや、あれはまたまったく別のお話で…。むにやむにやむにや…



のっぽ 震災後ずっと東北を駆け回ってるようだけど、向こうではどんなことしてるの？

高橋 幼稚園や小学校、仮設のみなさんに創造時間をお届けしています。震災で一面泥色になった被災地に、せめて明るい色を届けたい！と思ったのが始まりで。大きな大きな用紙やビニールに無心に絵を描いたり、世界でたった一つの大マスクコットをつくつたり。ノッポさんに、全国の美術館で造形プログラムをナビゲートいただきましたよね。そういうことを東北でもやっています。

のっぽ そうかあ。でも、美術館のようにはいかないでしょ？

高橋 おっしゃるとおりです。まるで旅回り一座の



のっぽ そうか。まだまだなんだねえ。でも、震災直後といまでは、子どもたちの様子は変わってきているの？

高橋 はい。子どもらしい表情が戻ってきてます。個人差はありますけど…。一方で大人や高齢者に、心が折れそうな方が増えているように思います。前向きにがんばる気力が限界にきてるかもしれません。ドメスティック・バイオレンスや自殺も心配な要素です。アートの力がどれほど役立つかわかりませんが、少なくとも、かかわる子どもたちが

私の仕事が知らず知らず、テレビの向こう側のたくさんの子どもたちに影響を及ぼしたように、高橋さんたちの活動も東北の小さいヒトや大きいヒトに何かの種をまき、いつか思ってもみなかつた花が咲くこともあるかもしれません。そして、東北の

小さいヒトたちは、高橋さんたちの活動を通して、自分以外の信頼できる人たちの存在を知ることができます。それは大きいヒトと小さいヒトの友情。アート、というか、創造力はすべてを超えて、心を通わせる力があるのかもしれません。

たかみ のっぽ

1967年から20年以上放送されたテレビ番組「なにしてあそぼう」「できるかな」で鮮やかに工作を生み出す「ノッポさん」として出演。作家として多数の児童書・絵本・エッセイを発表するほか、俳優・歌手・演出家として幅広く活躍中。05年「グラスホッパー物語」で歌手デビュー。09年3世代に贈るミュージカル「ありがとう！グラスホッパー」、13年より「ひとり芝居 ノッポさんの宮沢賢治」を公演中。第48回日本児童文芸家協会児童文化功労賞。

中野吏智子

(明和保育園主任保育士／岩手県大船渡市)



東日本大震災から間もなく2年8ヶ月。当保育園は大船渡市の中央部大船渡町の高台にある定員120名の保育園です。幸い津波の被害はなく、園児保護者、職員全員無事でした。当日のことは特別な一日として色あせることなく覚えています。その後は恐怖や不自由な生活でしたが、無我夢中で過ごしてきたのであつという間に過ぎてしまいました。大人は震災で失くしたを取り戻すために無理をし、子どもたちのためにがんばっているつもりでも、知らず知らずのうちに子どもたちに負担がかかるいる場合があったようです。将来子どもたちにどういうかたちで現れるか、不安がないわけではありません。

ARTS for HOPE のしゃぼん玉を使った活動で、たくさんのしゃぼん玉に包まれ、夢のような経験をさせてもらいました。お世話ををしていただいた皆さんにとってフレンドリーで、子どもたちはまるで友だちのように接していたのが印象的でした。子どもたちと同じ目線に立ち、子どもたちの気持ちに寄り添って一緒に遊んでいただいた経験が何より楽しかったようです。

福島でのハッピーフラワープロジェクトにも参加しました。海岸が、皆の優しさで花一杯になり、福島の皆さんも笑顔になってくれたようです。私たちよりずっと大変な状況の皆さんも笑顔になることができて本当によかったです。

大船渡は復興計画に沿って少しずつ新しいまちづくりが進行しています。季節は秋から冬に向かい、そして3回目の3月11日がやってきます。毎日できることを少しづつがんばっていきたいと思います。ご支援ありがとうございました。

齋藤良江([独法] 国立病院機構宮城病院
療育指導室保育士／宮城県亘理郡山元町)

2013年10月、ワンダーアートプロダクション(WAP)ご協力のもと、当院の重症心身障害児(者)病棟にて合同お楽しみ会が行われました。当院は東日本大震災が起る前まで、毎年秋祭りを開催していましたが、震災後なかなか大きな行事を行えませんでした。震災から約3年が経ち状況も落ち着き、今回ようやく病棟全体での合同行事を開催できました。3年振りの行事。何か皆で一つのものを記念につくりあげたい!そこで出会ったのがWAPでした。

病棟では季節の歌を利用者と歌ったり、季節に合わせた装飾を作成したり、さまざまな療育活動を行っています。なかでも、絵を描くことが好きな利用者が多く、手だけではなく足を使うなど、さまざまな方法で描くことを楽しんでいます。この大好きな活動を、いつもは違うかたちでダイナミックにできたのが今回の活動でした。大きな透明ビニールシートのキャンバスを天井からぶら下げ、いつもとは違う雰囲気のなかスタート。少し遠慮気味に描き始めた利用者、ご家族でしたが、徐々に表情も和らぎ楽しい雰囲気のなか夢中で笑顔で描いていました。キャンバスには利用者、ご家族、職員の総勢200名以上が、色とりどりに好きな果物、好きなキャラクターなどを描き、その一つひとつの絵をつなぎ合わせ、一つの大きな迫力ある作品が完成しました。作品は当院の中央廊下に展示され、真っ白で少し殺風景だった廊下が朝、日中、夜それぞれ違う雰囲気で入院患者さんや訪れる方々、職員を笑顔にしてくれています。参加された利用者やご家族、職員から「楽しかったなあ」と思いつき絵を描いたのは初めて!」「二度と経験できないことをさせてもらってホントうれしい!!」「感謝だよ!!」等、たくさんのうれしい言葉があり、たくさんの笑顔を見ることができます。今回の活動を通して絵のすばらしさをあらためて感じました。

このような活動をさせていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この場をお貸りしてご協力いただいたWAPの皆さんに感謝申し上げます。

本郷由紀子

(宮城支局スタッフ／宮城県多賀城市在住)



南相馬の幼稚園でハッピーペインティングを行った時、とてもうれしかったことは、ふいに手の躊躇もなく、小さな手が私と手をつないできたことです。その手は小さいけど温かく、ためらいもなくしっかりと握ってきました。ペイントがほぼ終わり、これからお昼を食べようというちょっとした合間の出来事。

ペイントの最中は子どもたちは夢中になって描きまくり、手や足や顔や体で、思う存分発散!普段は叱られるようなことも、その日その時間は自由です。大きな画面にぐちゃぐちゃべたべた、顔中体中絵の具だらけになってしまってOK!!ペイントのよさは、何かを描くことではなく塗りたくることで自己を開放でき、体を動かすことで鬱積したものを外へ出せることです。アートの本質はそういうことだと思うのです。内なるモノ。それを表に発信すること。

東日本大震災という災害は、いまでも深く重く被災した誰の心にも突き刺されています。被害の度合いはさまざままだとしても、辛さや苦しさを測って、あなたはこれくらい、あなたはこれだけだから大丈夫ね、という話にはなりません。抱えていたりそれの苦しみや辛さは、その人だけのものであり、その人がずっと持ち続けなければならないものかもしれません。でも、一時、それ自体を忘れる時間や別なことに集中できる時間を持てたら、「苦しむ」ことに対して、重きをおかなくてよくなるかもしれない。人の心に寄り添った支援は、ずっと続けていくべきだと考えます。躊躇無く手を握ってくれる小さな手は、まだまだたくさん待っています(もちろん大きな手も)。

小関理

(宮城支局スタッフ／宮城県白石市在住)

**ワークショップを続けていくなかで感じたこと**

避難所で針と糸を持って「針仕事するのは何日ぶりだろう…みんな流されてしまったから」と言っていた中年の女性。人形をつくりながら首にかけたコインを指さし「これ、息子が持っていたものの」と言う人。無心に人形づくりに没頭するなかでの何気ない一言が、重く真に迫っていました。

仮設の集会所での出来事。最初はよそよそしい雰囲気の中で始まったハッピードール。無言の針仕事の後、あちこちで「あんだも〇〇地区なの…」の声があちこちで聞こえてくる。地域社会から離れてしまった人たちが、もう一度安心できる人間関係を見つけつつある一瞬だと思いました。

小学校でのハッピーペインティング。支援学級の子どもが皆と一緒に夢中で描いているのを「よかつたなあ」と思いワークショップを終えた後、先生から「あの子は3.11以後何もしなかったんです。それが今回一生懸命絵を描いていて皆びっくりしているんです」と聞きました。

仮設村の集会所に通い始めた頃に母親の背中にくくりつけられていた子が、最近見よう見まねで針と糸を使おうとしている姿を見ると人間のすばらしさを感じます。児童館のこと。ワークショップをしている最中、保護者からの「あの子見ない子だね」という言葉に対し先生が「最近、避難先から戻ってきた子ですよ」と言っていました。福島の大変さがわかり悲しくなりました。

小原風子

(福島支局スタッフ／南相馬市在住)

**福島現地スタッフの手記**

福島の現地チームでは、毎月仮設住宅でのハッピードールのワークショップと児童クラブ(放課後学童クラブ)にて、お絵かきなどのワークショップを行っている。

児童クラブの子どもたち

南相馬の児童クラブを初めて訪問したのは、震災の年の5月のこと。東京チームと一緒に、初めての訪問だった。放射能の影響で外遊びもできなかった子どもたち。大きな紙にその時彼らが描いた絵は、真っ黒なブラックホールと、毒ガスを吐く恐竜。「僕は子どもだからどうしたら恐竜の毒ガスを止められるか、まだわかんないんだ」とといって画面に思いをぶつけていた子どもたち。それから數ヶ月して、また会いに行った時には、今度はたくさんの葉をつけた植物が空に向かって伸びる様子を描いた男の子、空を飛ぶ羽の生えた生き物を描く女の子がいた。真っ青な空の種を大きく描いていた子が、心に残っている。津波で流され何にもなくなってしまった景色が、夏の緑の植物が生え、黄色い花が揺れる景色に変わる頃だった。子どもの絵からも再生していくエネルギーを感じた。

それから、避難準備区域の解除などにより、何度も通学する学校が変わり、児童クラブも変わり、子どもたちは、自分たちの居場所を転々としながら生活しなくてはならなかった。ワークショップで訪問した時、皆の心が落ちつかないように感じる時期もあった。その後校庭の除染が進み、外遊びができるようになった。子どもたちも体を動かすことによって、心も穏やかになってきたように感じられた。2012年の冬、子どもたちと扇をつくって空に飛ばした。いつまでもいつまでも、お迎えが来るまで夢中で校庭を駆け回る子どもたち。震災前だったら当たり前のその風景が、涙が出るほどうれしかった。

震災直後から比べると、だいぶ落ち着いたように感じられるが、子どもたちは、いまもさまざまな思いを抱えている。願いごとカードに、「大人になるまで生きられますように」と書いた子。「なんでテレビでは、福島の子どもたちはかわいそうだっていうの?私は、かわいそうなんかじゃないのに」と呟いた女の子。ARTS for HOPE (AFH) の活動を通して、そんな一人ひとりの子どもたちと、笑顔の瞬間とともに感じられたなと思う。つい先日は、皆で大きなシャボン玉をつくりて遊んだ。青空にたくさんのシャボン玉がキラキラ輝いていた。子どもたちが笑って、私も笑った。

第一幼稚園・鶴住居幼稚園(岩手県釜石市)

当園は釜石市の中心街にあり、震災で家屋を被災した園児が多く通園しています。私たちは子どもたちが幼稚園で楽しく過ごしてほしいという願いを持ちながら保育をしていました。震災から1年8ヶ月たった頃、ARTS for HOPE さんから「子どもたちに元気を伝えたい」と声をかけていただきました。当日は年長児の活動でしたが、保育室いっぱいにシャボン玉が飛び、それを取ろうしたり、追いかけてたりして、子どもたちの笑顔と歓声が溢れていました。その後大きな紙にシャボン玉の絵を描いたのですが、どの子も生き生きと描きはじめました。なかには普段絵を描くこと

渡部俊一

(南相馬市住民)

**災害とボランティア**

私の家は海岸より約1.3キロメートルの純農村地帯にあり、大震災による津波で大規模半壊となって、周囲は瓦礫の山でした。原発より20キロ圏内にあるため避難を余儀なくされ、会津に3家族(私と娘と妹)12人で一戸建てアパートを借り上げ避難生活を続けていましたが、母が行方不明になるとたびたび、警察の世話になること4回。震災前は自活していた母ですが、慣れない避難暮らしのせいか6月に認知症と判断され徘徊が続くので、娘の家族を残して7月に南相馬に戻りました。当初は自宅を移転するか戻るか大いに悩みました。2012年4月より昼間の一時帰宅は可能になりましたが、家は築1年

仮設住宅の皆さんと

2012年10月にAFHの福島支局が立ち上がり、私も現地チームのスタッフとしてほぼ毎月、南相馬の何所かの仮設を定期的に訪問している。私は小さい頃、両親が共働きで祖母と祖母の姉に育てられたので、大のつくほどの、おばあちゃん子だった。そのせいか、仮設でのおばあちゃんたちとの Happy Doll (人形づくりのワークショップ) のひと時は、なんだか心が和み、いつも逆に元気をもらっているように思う。何度もお邪魔しているうちに顔も覚えていただき、次の訪問のためのチラシを配りに行った時に、「フーちゃん、待ってるよー!!いつも、次来てくれるの、カレンダーに丸つけて、楽しみにしてるんだよ」と言ってもらえたのは、なんだかうれしかった。

おばあちゃんたちとの時間は、いつも、あはは、おはは、笑顔で過ぎていく。それでも本当は皆心にいろんな思いを抱えている。時折、ほろっと、いまのどうしようもない心の奥の思いがこぼれる。「津波で亡くなったお父さん(ご主人)が児年だつたから、今日はウサギさんつくつて、お父さんのお仮壇の横に飾ってあげたいなあ」と話されたKさんは、毎回AFHの訪問を楽しみにしてくださっている。そのKさんとお話ししていたときのこと。「今日の午前中、ほんとの家に、娘と久しぶりに戻って来たんだあ。そしたら、草がボウボウに伸びてて。お父さんはとてもきれい好きな人だったから、震災前、お父さんが生きてた頃は、庭がみんなにボウボウなことなんか、なかったんだよ。それ見たら、涙出てきちゃってねえ」と、目を真っ赤にされた。「帰りたいな。お父さんと暮らしてたあの家に帰りたい。ここでは、死にたくないよ」と話すKさんの手をぎゅっと握った。

ここ福島には、Kさんのような思いを抱えたたくさんのお年寄りが、いまも仮設住宅で暮らしている。まだまだ私たちが回りきれない仮設住宅もたくさんある。仮設住宅だけでなく、借り上げ住宅で孤独に過ごすお年寄りも多いとのこと。「家のなかにいると心が沈んじゃうから、こうやって、皆で手を動かしながら、一瞬でも笑っていたいんだよ。また来てね」との声に、「うん!また来るね」といつも笑顔で次を約束しながらお別れする。

願いごとカードというものを、時々プログラムの終わりに書いてもらっているのだが、「いつか自分の家に帰れますように」「家を建てて、住むことができますように」という願いごとのなかに、「アーツフォー ホープがずっと続きますように」と書いてくださったおばあちゃんがいた。胸が熱くなった。おばあちゃんたちが、安心して地元に戻る日が来るまで、一緒に笑顔のひと時を過ごせたらと思う。

アートのもう力とは

アートには、心を伸びやかに解放し、心と体を解放する力があると思う。児童クラブの子どもたちや、仮設住宅のお年寄りとワークショップをしていると、ふとそんなことを感じる。そして、アートは生きる力を取り戻すための、希望であると思う。

に抵抗感があるのか、なかなか描き出せない園児もいましたが、この子たちもいろいろな色を使って好きな絵を描き進めていました。子どもたちの楽しそうな声、表情を見られたこと、このような経験をさせていただいたことは、保育者としてこんなうれしいことはありません。子どもたちは自分の絵を認め誉めてもらったことが何よりうれしかったと思います。これからもこのような楽しいことを積み重ねていくのは、とても大切だと心から感じています。

9カ月で大工さんが修理すれば住めるということで戻る決心をしました。周りの瓦礫は自衛隊が撤去してくれましたが、家の床下は泥が40センチも溜まっています。そこで知人がボランティア(復興浜団の代表)活動していることを知り、泥の払い出し洗浄掃除、周辺の清掃、ドブさいらいをお願いしたら快く引き受けました。のべ4日間約120人、若い女性、年配者、外国人の方、全国からおいでいただき嫌な顔もせず和気あいあいと作業しておりました。若い女性の人が化粧した顔に泥をつけて一生懸命一輪車で泥運びをしている姿が印象的で感動を覚えました。

2012年12月に家の修復作業を始め、2013年6月頃、高さ180センチ長さ50メートルのコンクリートの堀をつくりました。殺風景なので誰かが絵を描いてくれる人がいないか探していたところARTS for HOPEさんを知り、元気の出る絵をお願いしたところ快く引き受けいただき、明るい花模様の絵を描いてくださいました。そこを通る多くの人や観光客が立ち止まり写真を撮って行きます。私も一日でも早く帰還できるよう、絵に元気をもらいながら復興に取り組んでいます。全国のボランティアの皆さん、南相馬市民は希望をもって前進しますとともに、これまで支援いただき感謝申し上げます。

坂口 ジェニファー

(リオ ティント ジャパン[株])



「意義あるボランティア活動への支援は、未来に向けた投資として位置づけ、継続的に行なう」—これが弊社の CSR 活動の理念です。未曾有の惨禍をもたらした東日本大震災から2年以上が経過した現在、その記憶の風化が一部で懸念されておりますが、震災の傷跡を、「アートの力」で癒すことに日々奔走されているARTS for HOPE(AFH)の皆さんの活動は、弊社のCSR理念にまさに合致するものであり、2年前よりその活動に協賛させていただいております。

弊社からはAFHへの財政面での支援と併せて、2012年には7名、2013年には6名の従業員とその家族が、被災地の子どもたちとのサマーキャンプのお手伝いをさせていただきました。参加させていただいた従業員は一様に、子どもたちの持つ強さ、優しさ、そして創造力のすばらしさを学んで帰ってまいりました。何もないところからでもつくり出せる「アートの力」によって、未来を担う子どもたちが一つでも多くのことを学ぶことが、復興への助力となっているのだと思っております。

AFHの活動を通じて、笑顔をとり戻し、たくましさを学び、またその活動からの支援を受けた子どもたちが、将来困った人たちを支えていくことができるよう、弊社としては、この未来に対する贈り物への協力を、微力ながら続けていきたいと考えております。

小野寺 明美

(本吉絆つながりたい事務局／
宮城県気仙沼市)



「ほっぷ」アート

(写真右)

2013年8月22～23日にかけてARTS for HOPE(AFH)さんの全面的ボランティア、ご支援により工事現場のような色合いの建物が、花と一緒に咲きみだれたように変身しました。2011年3月11日(金)午後14時46分、三陸冲マグニチュード9.0、未曾有の東日本大震災が発生。この地震は日本周辺における最大の地震となり、一変してしまった風

富澤 郁子

(大船渡保育園主任保育士／岩手県大船渡市)



子どもたちの心の解放を…と願い

3・11の出来事が子どもたちにどんな心的ダメージがあり、いつまでどんなかたちで続くのか、どう寄り添えるのか、何が有効なのか。身も心もぼろぼろで、意欲も湧かず、もがき悩む日々を送っている大人たちが子どもたちに寄り添っていくのか?—そんななか、音楽や絵画で、いっぱい遊んでいたいたいたり、いろいろな形で支援いたいたいたり、その時々を目まぐるしく、体当たりで時を過ごしていた感じでした。その一つひとつの積み重ねが、心の解放に向く薄皮をはがしていく作用を果たしてくれたと実感しております。

全身を使い描く経験を ARTS for HOPE で繰り返すなか、園庭いっぱいにセッティングし、子どもたちが周りを気にしないでエネルギーを爆発させ、心を解放し、はちきれんばかりの歓声と笑顔に包まれる活動として、私たち職員の中では位置づけられていました。今回の20メートル以上の厚手の透明なビニールシートに描く経験は初めてのこと。木から木に通路のように張られたシートに思いつき筆を走らせ走り回る子ども、じっくりとどまって描く子ども、彼らの表情に圧倒される職員たちの姿がありました。どこでその作品は「完成」といえるのか?エネルギーを使い果たし、最後に透明な不思議な迷路空間を、夢中で走って通り抜けられる圧倒的な興奮がありました。透明作品は、2013年11月17日の園内作品展で、園庭に不思議な道として張り巡らせ、また、子どもたちが夢中で駆け回る空間としてセッティングしてやりたいねと話し合っているところです。心の解放ができた日をプレゼントいただき、本当に感謝いたしました。ありがとうございました。

高野 好眞

(商店主／福島県南相馬市)



南相馬市で焼き鳥屋を営業しています。ARTS for HOPE (AFH) 高橋雅子代表との出会いは、2012年の「第一回のまおい夢気球プロジェクト」がござりました。このイベントは、原発の影響で大勢の南相馬市民がまちを離れ、大半の子どもたちがいなくなってしまったなか、事情があって、この南相馬市を離れない子どもさんと親御さんに相馬野馬追祭の神旗争奪戦が行われる「雲雀が原」に、この地方では初めての熱気球を呼んで、あの広い芝生の上で、短い時間でも、気球に乗って、気球を眺めながら、元気に楽しく過ごしてもらいたいと企画しました。

いまでも忘れません、これに最初に高橋代表が店に来て、「イベントと一緒にさせてください」と。被災地ゆえ屋内だけでの活動だったなか、自分の企画を知って、ぜひ子どもさんたちと一緒に外で遊ばせたいとのことでした。開催直前に地元からの反対もありましたが、直接話し合って説得てくれたのが、主催者側の自分たちではなく高橋代表でした。おかげさまで、今年も一緒に開催できて、本当にいつも感謝しております。そんな AFHさんの活動もいまでは全国に広がり、代表を支える大事なスタッフの方たちも、少しずつ増えているようで本当にうれしいです。

景や環境によりいつの間にか子どもたちの心が傷ついてしまいました。「笑顔を失う、暴力をふるう、物を壊す」などの行動が起き、震災から2年経過した現在もそのままの状態で、家族も限界にきておりました。その笑顔を取り戻したく、「子どもたちが安らげる場所」をつくろうと、いままであった障がい児の親の会を解散。「本吉絆つながりたい」という組織を新たに立ち上げ、皆さんからご支援により居場所「ほっぷ」が完成いたしました。しかしまりにもさびしい外見の建物に、完成当時は復興のためのどこかの建設会社の建物と思われていましたが、アートにより建物に命が吹き込まれ華やかな建物へと変身できましたのは、AFHの皆さんのおかげでした。

現在この場所は子どもたちが大好きな所となり、賑やかに毎日を過ごしています。一歩ずつではありますが自力でがんばって元に戻ろうとしている彼らにとって、このアートは最高のプレゼントとなりました。ありがとうございました。

本猪木 功

(NPO 法人福島県ベンチャー・
SOHO・テレワーカー共働機構相双支部／
福島県南相馬市)



千年に一度と言われる震災と津波、引き続き発生した大人の手前勝手な理由により現在なお継続している災害は、将来を担うべき子どもたちに大きな重い傷を残しました。親世代が、ごくあたりまえに経験してきた草花や木々の緑に触れるこども、川や海での水遊びも、公園の砂場で遊ぶことさえも、子どもたちには「それは、ダメ」と叱り声をあげる日が続きました。外での活動を制限された子どもたちは、次第に笑顔が少なくなっていました。

2011年の震災から1年。子どもたちの心を大人が心配し動き始めた時期が ARTS for HOPE (AFH)さんの活動に触れた最初でした。地域の NPO や市民団体、商店街などのイベントで、ともに活動されていたAFHさん。お絵かきやペインティング、ものづくりなど、小さな子どもから興味を持ち、皆で一緒に取組めるプログラムで、子どもたちに寄り添い笑顔を届けてくれてきました。ニコニコ笑顔を見せながら、手や腕や、着ているものにまで絵具をいっぱいにつけて作品づくりに取り組む子どもたち。

「子どもたちの笑顔は、周囲にいる大人たちをも笑顔にします」—子どもたちの笑顔を引き出してあげることは大人のシゴトです。子どもたちが笑顔でいることができないのは、大人たちが夢を語ることができなくなっているからです。子どもたちの笑顔のために、大人も一緒に夢を見ましょう。AFHさんの活動は、そう問い合わせているように感じます。

Our
Voices





Special Message Through the Arts

特別寄稿：アートを通じて

伊藤 正樹（公立相馬総合病院小児科医師）

震災から2年8ヶ月が過ぎました…

2011.3.11 未曾有の、想定外の、思いもよらない…大惨事が起きました。

私の勤務する公立相馬総合病院でも、突き上げるような揺れとまっすぐに立つていられないほどの大きな横揺れを感じました。天井から照明が落ち、防火シャッターがガタガタ揺れ、築40年の病棟は壁にひびが入りました。幸い当院は海岸線から5キロメートル程度離れており、直接の津波被害は受けずにすみましたが、2階の窓からは、今まで田んぼだったところが、海水で沼のようになっている光景が見えました。道端には漁船が打ち上げられ、田んぼは、たくさんの自動車や壊れた家屋の残骸で埋め尽くされました。

院内は比較的新しい病棟へ患者さんを移すために大騒ぎで、時間が経ち、辺りが暗くなつてくるなか、余震が次々と起り、一層不安が大きくなっていました。これからどうなつてしまふんだろう。先が読めず、ただ、運ばれてくる患者さんに対応するだけで精いっぱいでした。

一晩たって、さまざまな情報が飛び交うなか、テレビに映る映像を見て自分が置かれている状況が把握できましたが、その後、追い打ちをかけるように原発事故が発生しました。相馬から県外へ避難する人、逆に南相馬、双葉、浪江から相馬に避難してくる人、相馬の街中が異様な光景でした。

いとう まさき

1966年米国生まれ。85年福島県立福島高等学校卒業。91年福島県立医科大学医学部卒業。92年公立相馬総合病院、93年国立郡山病院、95年4月～2010年3月福島県立医科大学小児科に勤務。10年4月より現在まで公立相馬総合病院小児科に勤務。趣味は海外旅行(南の島)。好きな言葉は「Nothing ventured, nothing gained」。

こうした大混乱のなか、一人ひとりが、自分、家族、友人を守るために働き、尽くし、今日に至っています。

私は震災発生の一年前までは福島県立医科大学の小児科に勤務していました。血液疾患や腫瘍のお子さんの診療に携わっていました。Wonder Art Production の皆さまは、福島医大の小児病棟を訪ね、アートを通じて、子どもたちにすばらしいひと時と大きな夢を与えてくださいました。無心に絵を描く子、できあがった絵をみて喜ぶ子、そして親御さん…。つらい治療を受けて日頃なかなか見せてくれない子どもたちの笑顔を見ることができ、私たち医療スタッフも癒されたのを覚えています。

あれから数年がたち、ここ相双地区で震災後ARTS for HOPEとして活動する Wonder Art Production の皆さまのお力を再びお借りすることができます、とてもうれしく思っています。震災直後には相馬市内の避難所や仮設を訪問していただき、その後は南相馬市内の幼稚園、小学校、学童クラブの訪問や公園のリノベーションなどなど、さまざまな活動を現在も続けてくださっています。

震災後2年8ヶ月が過ぎました。この間、子どもたちの心と身体にはさまざまな変化が見られ

ました。

震災直後は、心身の異常を訴え小児科を受診してくるお子さんが大勢いました。一人で眠れない、夜中に急に目覚めて騒いでしまう、余震が起ると石のように固まって動けなくなる…。放射能を恐れ家から出ようとせず、窓も閉めきり、ミネラルウォーターしか口にしない…。情緒不安定なお子さんがたくさんみられました。避難先でいやな思いをして不登校になってしまったお子さんもいました。その後時間がたつにつれ、一見平穏な状況に戻ったように見えますが、テレビで原発に関する報道がない日はありませんし、天気予報の中あたりまえのように各地の空間放射線量が示されています。

2年8ヶ月が経過し、なかには震災は遠い昔のことのように感じている方もいるのではと思います。しかし、状況が少しずつ落ち着き、過度のストレスから解放されつつあるこれからが、心のケアの大切な時期です。原発事故によるさまざまなストレスを、子どもたちは子どもたちなりに感じています。そうした傷ついた心を癒すために、これからも温かいご支援をいただければうれしく思います。アートを通じて、皆さまつながつていけたらいいなど感じている今日この頃です。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。

参加者、ボランティア、サポーター、支局スタッフの声⑤

橋本 ゆう子

(仙台市中田児童館館長、元六郷児童館主任／宮城県仙台市)



ARTの力で笑顔と元気を取り戻した六郷の子どもたち

私は、昨年度まで津波で大きな被害を受けた地域にある仙台市六郷児童館に勤務していました。当館は避難者を受け入れていた市民センターが併設されており、何かと落ち着かず、子どもたちも思い切り遊べる場所が少なくなり、保護者も震災後の復興を目指して忙しい日々を過ごしておりました。そんな時 ARTS for HOPE さんより被災地応援のためのアートプロジェクトのお話をいただき、早速ハッピーペインティングをお願いすることになりました。大きな紙の上で思い切り手足を使った色遊びに、日常見られない子どもたちの笑顔と歓声が溢れ、それを見つめる保護者の方もまた笑顔になっていました。ARTが心を開き元気にしていることに気づかされ ARTの持つ力を実感いたしました。これを機に継続的な支援をお願いすることになり、現在に至るまでハッピードールをはじめたくさんのプログラムを開催していただきました。いずれも自由に創造力を発揮させることができ、仲間との触れ合いの場にもなっていました。皆さまのご支援のもと、子どもたちにたくさんの笑顔と元気が戻っているように感じています。心より感謝を申し上げるとともに、これからますますのご活躍をご祈念いたしております。

横田 美明

(南相馬市復興企画部除染対策課／元教育委員会事務局幼児教育課／福島県南相馬市)



あの大地震と巨大津波、そして原子力発電所の爆発と放射能汚染…あの時は、混乱を極め、子どもたちを育む環境などまったくありませんでした。もちろん、私たちは最低限の子育て環境を整えたつもりです。しかし、子どもたちの周りには、微笑みのない表情で柔らかさのない言葉を話す大人たちが、それは多かったことでしょう。そんなことに気づきもしない、気づいても手を差し伸べることができない時がしばらく続いたある日、高橋雅子さんを代表とする ARTS for HOPE (AFH) の皆さんが、子どもたちに「心穏やかな時間」を運んでくださいました。そう、子どもたちの周りから消えていた微笑みと一緒に！「はっ」としたのは、子どもたちだけではありません。私たち大人も穏やかな気持ちを思い出しました。厳しい環境に置かれた時、子どもたちは私たちが考える以上に不安を覚えることでしょう。そんな子どもたちのために、いやその周りにいる大人たちのために、これからも心穏やかな時間と笑顔を届けてください。ほら、手を絵の具だけにした子どもが笑っています。その子どもを見て微笑む大人がいます。そこは幸せの空間です。高橋さん、AFHの皆さん、幸せの空間をありがとうございます。

細谷 利津子

(陸前高田市住民／ボランティア)



心の花を咲かせよう

初めてハッピードールプロジェクトに参加したのは、震災のあった年の9月でした。色とりどりの布、ボタン、フェルト、糸、リボンなどが箱にいっぱい詰め込まれたのを目の前にして、私が大好きだった手芸が今日できるんだとでもうれしい気持ちになりました。優しいスタッフの皆さんの御指導のもと、布や糸を思う存分使って思いおもいの作品をつくついて自然と笑顔になり、心が和み、癒されました。参加した皆さんの作品を見たり、自分の作品が完成した時、いままで当たり前だと思っていたことが実はどんなにありがたくうれしいことかをあらためて感じたひと時でした。そして私は、ARTS for HOPE (AFH) の皆さんの活動に魅了され、ボランティアの一員として微力ながら参加させていただいています。ハッピードールプロジェクトを通して、「笑顔」「希望」「感謝」を、私の心の花を咲かせたいと思います。これからも心の傷を癒してくれるAFHの支援を継続してくださることを、そして地元での活動に加えていただけますよう願っております。

河津 あつ子

(ARTS for HOPE 運営委員／三日月デザインオフィス代表取締役)



2011年3月、自分自身も震災のショックからまだ抜け出られず、原発事故の恐怖で心がすっかり弱くなっていた時、被災した方々はいったいどれほどの痛みを抱えていたのでしょうか。それを少しでも和らげるのにアートが役に立つ！と聞いて、早速ワンダーアートプロダクションの高橋雅子さんに電話をして、この活動を立ち上げることになりました。何もかも手探りの状態で始め、ネーミングをして、いろいろな方から助けていただき趣意書を作成、翻訳をして外国へも発信するなど、あの頃のドキドキ感、不安などを思い出すと、それが遠い昔のような気がします。まずは親戚から手始めに、友人、そのまたお友だちなど、皆さんが共感してください、手を差し伸べてください、活動は一気にパワーアップ、ついには多くの企業の方々からも多大な支援を受け、メンバーのとどまるところを知らない推進力で、なんと1年に132回の遠征を重ねるに当たり、お母さん役の私は、ただひたすらスタッフが倒れないように、事故がないように祈る日々でした。私も何回か遠征に参加して、被災された方々との出会いに心が震えました。この感動を協力してくださった方々にもシェアしたい気持ちでいっぱいです。いまや3カ所に支部もできて大きく羽ばたこうとしているARTS for HOPEの活動に、どうぞ今まで同様に寄り添ってくださいますよう心よりお願いいたします。

認定NPO法人 フローレンスふくしま

インドアパーク南相馬園＆希望のゼミ学習室 スタッフ一同



インドアパーク南相馬園で ARTS for HOPE (AFH) さんと一緒に開催させていただいたイベントはいつも楽しくて、参加する子どもたちはもちろん、私たちも元気になります。2012年のクリスマスパーティーでは、AFHさんが用意してくださった大きな大きなお菓子の家に子どもも大人もみんなが驚き、夢中になりました。ハッピードールづくりではお子さんたちがキラキラした目で完成品を見せに来てくれたのが、とても印象的でした。「外壁大変身！」では、真っ白なだけだったインドアパークの外壁が、AFHさんと子どもたちの手でとってもすてきな壁に早変わり。壁塗りに参加してくれたお子さんも完成した外壁を見た大人もみんなびっくりで、その仕上がりに釘付けになりました。AFHの皆さんはいつも明るく元気で、笑顔がとってもすてきです。そして南相馬の仮設住宅や学校をたくさん飛び回って、子どもたちからお年寄りまで笑顔を運ぼうと奔走されています。AFHの皆さんの活動は、世代を超えた魅力を持っています。これからもアートを通して、みんなが元気になる活動を続けてくださることを期待しています。

山本 真由美

(トヨタ自動車[株]社会貢献推進部)



トヨタ自動車は、「クルマを通して、人やモノだけでなく、被災地へ支援の心」も運びたいとの考え方のと、「ココロハコブプロジェクト」を立ち上げ、東北の皆さまの笑顔のため、芸術・文化を通じた支援活動をはじめ、さまざまな活動を行つてきました。その一環として、ARTS for HOPE (AFH) 様の「子どもの心のケア」を目的に活動に取り組まれる姿勢に共感し、ご支援させていただいております。被災地で300回近いワークショップを重ね、その走行距離が地球1周分を超えるというかがい、心より感銘を受けました。AFH 様の最大の魅力は、その継続性と、どんな現場をも笑顔に変えるスタッフの皆さまだと感じております。また、現地ニーズが時々刻々と変化するなか、各地に支局を立ち上げ、企業との橋渡しも行う、AFH 様のような存在は被災地支援に欠かせません。今後は、AFH 様のご経験とネットワークをいかし、弊社社会貢献活動「トヨタ・子どもとアーティストの出会い」の協働パートナーとして、東北でのアーティストワークショップの開催にもご助力いただきたいと期待しています。



Special Message Through the Arts

特別寄稿 アートを通じて

松井 瑞子（聖路加国際病院形成外科医長）

心に届く活動

2009年にHappy Doll Projectの活動を知り、すぐに「うちにも来てください！」とラブコードを送りました。私は聖路加国際病院で形成外科の医師として勤務しています。形成外科はたくさんの分野の疾患の治療を行いますが、そのなかに先天異常の子どもたちの治療があります。生まれ持った体表面の異常に対して治療を行うのですが、手外科学会の専門医も取得していることから、手の先天異常の子どもたちとの出会いが多くあります。手にハンディキャップも持った子どもたちは、とても大変な学校生活を送ります。彼らはもちろん正常な知能を有しているため、普通学級へ進みます。しかし、団体生活を始めたばかりの子どもたちのなかで、何かをすることが遅い子ども（指の関節が曲がらないなどの症状がある場合）は、クラスでも引っ越し案な方に回ってしまうことが多いです。長くお付き合いし、そのような子どもたちをたくさん診てていると、学校でうまくいかなくなつたかな？と少しわかつたりすることもあります。でも、日常の診察のなかで、「大丈夫。いまは少し大変でも必ずあなたに似合った場所があって、一生懸命生きていれば必ずそこに辿り着けるよ」と伝えることは、なかなか難しいものです。

そんな時にHappy Doll Projectに巡り合いました。参加を呼びかけたのはうまく鉢が使えないような子どもばかりです。お人形どうやってつくるの？？病院スタッフも興味津々でした。でもそんな心配はまったくありませんでした。高橋雅子さんはじめ、スタッフの皆さんのが魔法のように糊やホチキスを駆使して人形をつくってくれます。最初は遠慮がちだった子どもたち



聖路加国際病院でのHDPに参加してくれたみんな



避難所での活動に参加させていただきました

もすぐに目を輝かせて、何をつくろうか、どんな色でつくろうかと、テーブルの上に身を乗り出して夢中になってきました。それまでは、使えないだろうし危ないからと使わせていないかった鉢を初めて使ってみて、ゆっくりではあったけれどちゃんと使って、保護者とともにとても新しい発見になった子もいました。できないと決めつけていた親御さんも本当にびっくりして、何でもちゃんと説明してやらせてみると、反省したり喜んだり…。病院つて楽しいこともあるんですね！皆の顔にそう書いてあった気がして、こちらもたくさんの笑顔になつた時間でした。

チャレンジする心。このようなイベントに参加して、自分がつくったものを皆が見てくれて、評価をしてくれる。それは普段少しだけお友だちの陰に隠れてしまっている彼らにとって、非常に意味のあることなのです。ちょっとだけ積極的になつたり、自分でもこんなことができる自信が持てたり。1回数時間のイベントで何かが大きく変わるのはありませんが、小さいきっかけはつくれます。われわれはそれらが少しつゆっくり大きくなるのを辛抱強く待たなくてはいけません。そのためには、このような活動が継続して行われることが必要だと強く感じています。

私は東日本大震災後の2011年9月4日、宮城県石巻市と女川市の避難所に、ARTS for HOPEの被災地応援アートプロジェクトに同伴させていただきました。被災地の当事者でなくとも、東京で鬱々とした生活を送っていた時だったので、当事者の方々はどんな思いでいらっしゃるのだろうかと、被災地に到着するまでさまざま

まついみづこ

東京女子医科大学卒業。東京女子医大一般外科研修から形成外科医に。東京慈恵会医科大学講師を経て2003年から現職。先天異常の子どもたちとのキャンプなどを主催している。体力だけは研修医にも負けない、海をこよなく愛する女医。

参加者、ボランティア、サポーター、支局スタッフの声⑥

内海 聰子

（ひまわり工房/[一社]おがるスターズ代表／宮城県東松島市）



忘れようにも忘れないあの日の時のこと

心はあるで浮浪者のように落ち着かず、ふらふらさまよった日々を送り、いまあるこの仮設にとりあえず辿り着いてホッとしながらも、あまりの突然の変化のなか、苦痛の生活を始めて2年の月日が流れました。ようやく当時のことを言葉にして表現できるまでになった今日この頃です。その間たくさんの支援の方々の手によって、衣・食・住は何とか満たされたものの、やはり人間として一番大事な部分でもある心は、いつでもポツカリ穴の開いた状態の生活…。そんな満たされない思いが、悲しみと苦しみに重なりあって、本当につらい日々でした。

そんな時に、ARTS for HOPEさんと知り合えたのは幸せなことです。渴いた心に水が染み込むように、イベントを心待ちにするようになるのは必須のことだったと、あらためて感じています。自分の主張が上手にできない子どもたちにとっては、どんなに楽しいことだったでしょう。アートは心を柔らかく解してくれる、そんな力があることを実感しました。いきいきとした目、伸び伸びとした仕草、そして、張りのある元気な声に、私たち大人も、思わず微笑ましくなるほどでした。何度も回を重ねていくほど心が満たされているのを目の当たりにしたものです。

やがて、それぞれがそれぞれの場所に移り再出発をしていくことになりますが、ここであったことが、すばらしい思い出として、しっかりと記憶に残していくことでしょう。あらためて、こんな機会をいただけたことに心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

松本由美

（宮城支局スタッフ／宮城県名取市在住）



ARTS for HOPE (AFH) の存在を知ったのは震災から1年過ぎた頃でした。それまで私は、耳が聴こえない子どもたちが、アートを通して聴こえる社会に対するストレスや不安などを取り除くことができるよう、月1回のボランティア活動をしてきました。私自身、聴覚に障がいがあり、これまでの体験から、同じ障がいを持つ子どもには、同じ体験のロールモデルが一番心に触れることができると確信しているからです。しかし少人数でのボランティアに限界を感じ始めていた矢先、AFHの存在を知りました。すぐに代表の高橋雅子さんに私の思いを伝えたところ、快く、ぜひ一緒にイベントをやりましょうと背中を押してくださいました。先日、仙台で（おそらく全国で初めてではないでしょうか）耳が聴こえないお子さんと、その兄弟、聴こえない親御さんを対象に、手話つきアートイベントをやりました。手話という目に見える情報も提供され、自分の子どもと一緒に楽しめるイベントに参加できたことに、聴こえない親御さんも大変喜んでくださいました。これまでには、聴こえるお子さんだけイベントに参加させ、聴こえない親御さんは後ろで、何を言っているかわからない状況で見守るだけだったと正直な気持ちをぶつけてくれました。このイベントが河北新報子ども新聞に載り、それを見てくださった方々から、ぜひ各地でやっていただきたいという声が出てきました。AFHに聴こえない子どもたちのためのプログラムを採用してくださって感謝しています。これからももっと広めていきたいと思っています。

高橋 育（原釜幼稚園副園長／福島県相馬市）

ARTS for HOPEの皆さまへ

晩秋を思わせる頃、先日の活動後に撮った写真が届きました。とてもよく撮れていて再びあの時の感動を覚え、うれしくなりました。用意していただいたマットだけでは足らず、自分たちの顔、腕、足までもペイントし、お互い笑い合っての楽しい時間でした。私たち幼稚園側だけではできない活動だと、あらためて思い感謝しております。ありがとうございました。

被災地という特別視、特別扱いを受け、日々それだけで落ち込んだり自分がいじけていると感じることもありました。言葉では伝えられない、被災した人たちに寄り添う支援はとても難しいと思います。ARTS for HOPE代表の高橋雅子さんは早期に被災

佐藤文子

（宮城・岩手支局スタッフ／宮城県気仙沼市在住）



ARTS for HOPE (AFH) 様が当地区に支援に来てくれたのは震災からちょうど3カ月後の6月11日でした。肉親を失ったり、行方不明者を捜したり、救援活動に邁進する人たちが、「しばらくで針を持ち心安らいた」とか、完成した作品を手に「楽しかった」と笑みを浮かべてくださったあの日から2年半が経ちました。日常は取り戻せたかに見えますが、まだまだ心に受けた傷は癒せてはいないなか、それぞれがんばっています。特に、障がいをもつ子どもの親御さんは東日本大震災に遭遇し、さらなる困難を抱えることとなって、障がい児施設の立ち上げに全力を傾注していることを知る機会があり、自分も何らかのお手伝いをしたいと思いました。その「障害児施設・気仙沼市本吉辯繫がりたい」の外壁にAFHの活動がいかされ、その活動に地元のスタッフとして加わることをとてもうれしく感じています。施設の子どもさんのその後の様子や地域の方々の声をおたずねしたところ、「笑顔を失った子どもたちに笑顔が増えました。何の変哲もないプレハブに花が咲いたようになり、建物にも命が吹き込まれ笑っているような施設に変身いたしました。施設の外に聞こえる笑い声。いまは近所の人たちも気軽にいらしてくださる施設となりました。感謝いたしております」とのメッセージをいただきました。

植松 健
(ボランティア／リオ ティント ジャパン[株])



みあげてごらん～ よるの星を～♪ キャンプ初日の昨日溶かしたクレヨンでペイントした「マイろうそく」に火がついた。心地よいサックスの音色をバックに、最後の夜のイベント「キャンドルサービス」が始まった。さっきまで垂れ込めていた厚い雨雲が退場すると、今度はキラキラ星の出番だ。私のかわいい7人の「息子たち」は、脂肪分100%の私の腹を枕にすやすや眠っている。無理もない。彼らは「土絵の具」を求めて真夏の炎天下、必死で山間を駆け回ったのだ。やはり子どもには泥んこがよく似合う。でも彼らには思いつき泥んこになれる地元がない。案の定、体力と集中力は今夕の「土絵の具壁画」の完成間際で力尽きたが「So what?」だ。いよいよ明日は「息子たち」とお別れの日。気の利いた言葉の1つもかけてやれるだろうか――

今夏、私はARTS for HOPE (AFH) 主催「アートキャンプ」森のアート海のゲイジュに、会社のボランティア休暇制度を利用して参加しました。東日本大震災被災地の子どもたちとともに遊び、笑い、喜び、悲しみ、そして多くのことを学んだ2日間でした。その時リーダーとして受け持った私の「息子たち」のことは、4カ月過ぎたいまでも片時も頭から離れることはできません。献身的活動を続けるAFHのスタッフの皆さんに心から敬意を表すとともに、このようなすばらしい機会を与えてくれたことにあらためて感謝します。できれば来年もまた参加したいと思っています。

地に入り、混乱している人々をそばで励ましたと聞いております。いま、被災地が何を必要としているのか、考えてくださったのかと思います。当園は少しでも子どもたちの心が安定するよう、震災から1カ月後に新学期をスタートしました。大人たちが動搖しているなか、不安でいっぱいの子どもたち。園に来ればお友だちと1日遊んで子どもに笑顔が戻れば大人たちもほっとできると願つてのことでした。子どもが元気になれば大人たちも元気になり活気も出る、荒れた心には子どもの笑顔が一番だと信じています。子どもたちを笑顔にしてくれてありがとうございます。

Our Supporters

支援の輪

ARTS for HOPEは、皆さまから託していただいた温かなご支援、ご協力を、プログラムに込めて東北各地にお届けしてきました。資金支援、募金の呼びかけ、物品寄付、技術協力、ボランティア参加など、ご支援のかたちはさまざまです。支援の輪のさらなる広がりを願っています。

【企業・団体】(五十音順)

アサヒビール労働組合

- ・アサヒビール労働組合によるご寄付(2012)
- ・アサヒワンピールクラブによる衛生用品等のご寄贈(2012)

American Express International, Inc.

SMILE JAPAN

- ・「アメリカン・エキスプレス 東日本大震災子ども支援基金」より活動全般に対するご寄付(2011)

株式会社 メディサイエンスプランニング

- ・活動全般に対するご寄付(2011)

MEDISCIENCE PLANNING INC.

- ・PCのご寄贈(2013)
- ・南相馬で開催した子どもたちのクリスマスパーティへのご寄付(2012)
- ・画材等のご寄贈(2011)

Morgan Stanley

王子ネピア株式会社

- ・nepia東北地方被災地支援活動「支える人を、支えよう!」による商品売上の一部寄付、社員ボランティアの参加(2011)

nepia

花王株式会社

- ・活動全般に対するご寄付(2011)
- ・アートキャンプのご協賛、社員ボランティアの参加(2012)

kao

クレディ・スイス証券 株式会社

- ・子どもの施設、仮設住宅等特定プログラムへのご寄付(2011~12)
- ・社員ボランティアの参加(2012)
- ・文具等のご寄贈(2013)

CREDIT SUISSE

コーチ・ジャパン

- ・被災地応援イベントの共催(2012)
- ・チャリティーオークション収益の一部をご寄付(2012)
- ・社内募金活動によるご寄付(2012)
- ・社員ボランティアの参加(2012~2013)

COACH NEW YORK

リオ ティント ジャパン 株式会社

- ・活動全般に対するご寄付、物品(おもちゃ等)のご寄贈(2011~2013)
- ・サーマーキャンプへの社員ボランティア参加(2012~2013)
- ・社内レセプションにおける活動紹介の場の提供(2013)

Rio Tinto

公益財団法人YMCA同盟 国際賛助会

- ・マッチングサポート(2011~12)
- ・チャリティコンサートにおける活動紹介の場の提供(2011)

YMCA FCSC

コニー株式会社

- ・活動全般に対するご寄付(2011)

KomyMirror

ゴールドマン・サックス証券 株式会社

- ・南相馬で行うプログラムへのご寄付(2011~12)

Goldman Sachs

サノフィ株式会社

- ・画材等のご寄贈(2011)
- ・社内ファミリーデーにおける活動紹介の場の提供(2011)
- ・社内募金活動によるご寄付(2012~2013)

SANOFI

在日米国商工会議所 (ACCJ)

- ・活動全般に対するご寄付(2011)

ACCJ

シチズンホールディングス 株式会社

- ・全国のグループ会社から届いた画材等のご寄贈(2011)
- ・クリック募金によるご寄付(2011~12)
- ・車載LED開発関係部門がシチズン電子創立記念日にて団体賞を受賞し報奨金の一部をご寄付(2012)
- ・活動全般に対するご寄付(2013)

CITIZEN Micro HumanTech

株式会社ジェーシー

- ・アートキャンプへのご寄付(2012)

JCB

株式会社 損害保険ジャパン

- ・社員向け社会貢献ファンド「損保ジャパンちゅうくらぶ」によるご寄付(2011)
- ・社員向け「EーことCSRポイント制度」によるご寄付(2013)

損保ジャパン

株式会社第一製版

- ・団体パネルの印刷・提供(2011)
- ・活動全般に対するご寄付(2012~2013)

DAIICHI SEIHAN

トヨタ自動車株式会社

- ・活動全般に対するご寄付(2011~2013)
- ・社員ボランティアの参加(2011)

TOYOTA

公益社団法人 日本フィナンショナリー協会

- ・マッチングサポート(2011~12)
- ・チャリティコンサート、定例セミナーにおける活動紹介の場の提供(2011)

Bank of America Merrill Lynch

バンクオブアメリカ メリルリンチ

- ・東松島市仮設住宅のアートリノベーションと秋祭りへのご寄付、社員ボランティアの参加(2012)

FELISSIMO

ご寄付、物品協力、募金等のご支援

アートde博・美まつり実行委員会/

- 愛知県立旭丘高等学校(美術科3年生の皆さま※2011年)/麻の会/
- アスクル株式会社/株式会社アットファースト/株式会社インサイト/
- Inspiration Space FLEX 高梨/柴田+FLEX@YCC vol.2にご出展・
- ご来場くださった皆さん/有限会社エモントレー・デイングカンパニー/
- OGID株式会社 日本データテクノロジー/屋島教会幼稚園/
- 株式会社カラーワークス/KIホールディングス労働組合/
- ギャラリーICHIO/ギャラリーcomo & 浦口耕子/
- 小江戸大江戸トレニックワールド/コクヨS&T株式会社/
- 埼玉県済生会栗橋病院/CJキューブ・Giant Mango/
- 株式会社シャーリーテンブル/株式会社鈴木組/
- ソロブチミスト東京-青山/ターナー色彩株式会社/
- 株式会社竹尾/株式会社東京スタジオ/株式会社東武/
- 日本精密測器株式会社/NPO法人日本バスツール協会/
- NPO法人熱帯森林保護団体/株式会社BIRDS CERAMICS/
- HEART for Japan/Power for Japan/PINK BEAUTY/
- 株式会社ブーフーウー/ブラジルを知る会/株式会社三空出版/
- 株式会社ミューズ/“RISE” Charity Event & Cafe Absinthe/
- Really Useful Boxes/READYFOR!にご支援いただいた皆さん

赤い羽根共同募金 「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」(2011~13)

GBFund

公益社団法人企業メセナ協議会 GBFund(2011~13)

National Institute For Youth Education 「子どもゆめ基金助成活動」

子どもゆめ基金(2013)

公益財団法人 木口福祉財団 「平成25年度被災地復興助成」(2013)

ふくしまキッズ夢サポート事業(2013)

福島県地域づくり総合支援事業 「地域協働モデル支援事業」(2012)

福島県地域づくり総合支援事業 「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」(2013)

公益財団法人三菱商事 復興支援財団(2011~2012)

南相馬市子育て 応援基金(2013)

【個人】(五十音順)

- 青木明子 青木祥子 明石伸子 赤塚留美 秋山知加 秋吉牧子 有地真依子 安土忠久 五十嵐実 飯高かつら 伊加利美兎子 池田華代 生駒恵美 石井久弥子 石毛慎也 石毛恭子 石坂真智子 石崎美智子 磯野百合子 市瀬明美 板橋恵津子 一ノ瀬けい子 岩城京子 岩田稔夫 内田光喜 梅木富士夫 上野徹 魚岸由佳 江口あゆみ エコー母親クラブ 櫻本幸子 大方智子 大瀧里代 大場弥生 岡川圓 岡田直子 岡田美紗子 小川伊志郎 沖田さち子 長田重子 落合慈之 笠木恵子 勝木楓子 片岡香 金子史絵 亀渕友香 河津てつ子 河津緑 河原博子 菊地誠 菊地ふみ 木村利男 貴布根桂子 久保言史 栗栖みゆき 黒田珠世 麻谷宏 コマイヒデミ サイキタケシ サイキトモコ 斎藤梨津子 柳原祥子 幸豊子 佐藤潤 佐藤節子 佐藤まゆみ 佐藤美紀 佐藤百合子 三本松徹 塩崎さつき 塩崎里華 嶋田朝子 清水ゆり子 志田多恵 白石露 菅根衛 スズキチサト セガワヨシヒサ 副島由紀子 副田高行 染矢昌代 高木沙織 高橋康子 高野好眞 高見のつぼ 滝井真智子 澪田紀子 タキザワシホ 武井発子 田島敦子 橋さより 田中清子 田中ますみ 田宮亜紀 田村明子 力石晋介 塚田早苗 角垣功 坪井利枝 坪田和宣 手束紀子 寺尾のぞみ 富岡ひろみ 富手裕子 豊田浩之 長尾圭子 長岡淑子 長澤慎吾 長嶋恵利子 中田英雄 中野朱美 中道主税 中村正美 中村実生 中村文香 長畠佐代子 中山公子 二木淳子 西尾昌子 西山英恵 根岸里美 野木政宏 野崎春子 橋本さえ子 長谷愛子 長谷川千賀子 畠紀代子 服部修 服部妙子 濱本千津代 原田恭子 原田知子 平井美和子 福西健太 古家貴代美 HONOBONOテンイチ 堀川孝子 堀野百合子 本元美希子 前沢明枝 正林俊幸 真島京子 松生由紀子 松岡沙矢子 松岡敏子 松崎なつひ 松田シヴァ 松田ナオミ 松田充弘 松宮道子 松本佳世 松本二三子 松本れい子 MAYA MAXX 三浦潤 三木玲子 三箇美鈴 美田有紀子 南控控 宮里喜久子 向出奈央 村上和代 Megumi Caverly 森川敏子 役所広司 山内政人 山岡由佳 山口ひさえ 山田富士子 山田百合子 山手剛人 山西まだか 弓削英子 Yumiko Womack 吉田潔子 吉田文子 脇秀夫 渡部俊一 渡辺奈々子 渡辺晴子 渡邊摩里

ご支援、ご協力に心より御礼申し上げます

Toward the Future

今後に向けて—子どもたちの成長とともに

いまなお多くの人々が仮設住宅に暮らし、まちの再興計画に難儀し、土地のかさ上げ工事や瓦礫処理、除塩、除染、原発問題、さらにご遺体探しまで、気が遠くなる作業を同時進行で進めている—東日本大震災から約3年が経つ、被災地域の現状です。その荒涼とした現場を見る限り、私たちは、この先も長い復興の、実はほんの入口に立たされていることを実感します。

一時に比べれば落ち着きを取り戻し、平穏な日常が営まれ始めました。その一方で、将来への不安や絶望から自殺する高齢者が後を絶たず、うつ病や神経症を患う方々も増え、ストレスを抱えた学生の校内暴力や保護者による子どもへの家庭内暴力が増加し、小学校のトイレで子どもがリストカットするという信じがたい事件まで発生しています。せっかく生き残った命を自ら絶とうとする現実は、地震や津波の恐怖や原発事故以上につらいものなのでしょうか。

私たち ARTS for HOPE (AFH) の活動が、いったいどれほど東北の子どもたちや人々の心を和ませ、希望の光を届けられるのかは明確できません。しかし、継続することで、命をつかさどる心がわずかでも救われ、灯がともり、やがて希望の光が射すまちへと再生する、その一端を担えることを信じて、地域の人々の心に寄り添い、ニーズの変化にも対応しながら、これからも活動を続けていきたいと思います。

震災の風化と支援の減少で行き詰まる被災地の現状。何より、他地域との分断現象により忘れられ、置き去りにされていくことへの大きな心理的恐怖を感じる沿岸部の人々が多く存在します。

AFH の活動でつながった人々の声が凝縮する本書の刊行を通して、現地の状況を多くの方に知っていただき、風化や分断が少しでも軽減され、この小さな国が一つになって心を合わせ、力を合わせて復興を進めていくことを切に願っています。

多くのアート関係者と同様、私たち AFH も、自分たちに何ができるのか、何をすべきか、実際にお役に立てているのか、悩みながら走り続けてきました。震災間もない頃、水彩ワークショップは津波を想起させ子どもたちのトラウマになるという専門家の見解が新聞に掲載され、現場の感触との違いを感じることもありました。どんな活動も、その影響や価値は、すぐにはわかりません。状況に応じて変化もします。手ごたえを重ね課題を修正するなかで意味が醸成され、時間の流れのなかで、人それぞれに価値が見えてきます。そこで本報告書では、AFH の活動を記録するだけでなく、「アートを通じた復興支援」について、多くの方々に語っていただくことを試みました。今回寄せられたたくさんの声は、どれもいま残さねばならない貴重な言葉ばかりでした。

AFH は、これからも現地に繰り返し通い続け、人々と対話を重ね、自らの目で子どもたちの成長を見守り続けることで、自分たちの行ってきたアートを通じた心の復興支援の意味について考え続けたいと思います。

震災から1000日を迎えた2013年12月4日
ARTS for HOPE (文責: 高橋雅子、若林朋子)

ARTS for HOPE

「アートを通じた心の回復と地域の復興支援」

これまでの活動の成果

子どもたちの変化・成長

- 夢中になれる創作の時間が子どもたちを穏やかな心的状況に導き、笑顔を増やしました。震災で失っていた元の表情を取り戻した事例もありました。
- 運動不足解消のニーズを受けて取り入れた遊びや体操のプログラムが、ストレス緩和に大いにつながりました。
- 同じ地域での実施を重ねる中で、繰り返し参加する子どもたちの変化や成長を把握できました。

大人の負担軽減、地域のケア

- アートプログラムを通じて、安心できる時間と空間を提供し、子どものケアをともに行うことで、教職員、児童館指導員、保育士、親など、子どもたちを守る地域の大人的負担軽減につながりました。
- 不安やストレスを抱える大人が、活動に参加しリラックスすることで、自信を取り戻す大きなきっかけになりました。高齢者のストレスケアと孤立防止につながりました。
- 子どもの問題にともに取り組むための情報交換の機会、場となりました。
- 以上のような、高齢者を含む大人へのサポートが、地域コミュニティのケアにつながりました。

地域主導の体制づくり

- 岩手（大船渡市）、宮城（仙台市）、福島（南相馬市）に支局を開設し、スタッフ主導の継続的なコミュニティケアの体制が整いました。労働環境が著しく悪化した現地で、働く場を生み出すことになりました。

今後の目標

- 2021年までの継続的支援（10年計画で子どもたちの成長を見守る）
- 自治体、地元NPO、地元商店街等との協働による、さらなる地域密着
- 被災地の「いま」を伝える情報発信
- 施設の特性や生活環境に応じた新たなプログラム開発

参加者、ボランティア、サポーター、支局スタッフの声⑦

徳永恵美子

(ARTS for HOPE 運営委員／レンドリース・ジャパン[株])



ARTS for HOPE (AFH) と YMCA の被災地支援にかかわり多くの方々に経済的な支援をお願いに回るなか、身に余る温かいサポートや励ましをお寄せいただけましたことに心より感謝申し上げます。AFH は小さなグループですが、その何百倍もの心ある方々のご尽力により支えられ守られながら、被災された方々の心に寄り添いたいと努めてまいりました。ここまで活動を続けることができましたのは、手を差し伸べてくださったすべての方々のお力添えのおかげです。社会が全力をあげて復興を目指さなくてはならないこれから、子どもたち、シニアの方々、障がいのある方などをとりまく孤独と不安は、残念ながらもっと深刻になっていくと思われます。AFH のプログラムが目指すのは自分自身の心と向き合い、自分の可能性を信じようと子どもたちの心に勇気と情熱を取り戻すこと、また暗闇で一人で戦っている大人の方々も周りの人たちと笑いあうひと時により、苦しいのは私1人ではないと胸のつかえが少しだけ和らぎ、明日からを生き抜くための希望の灯を見出してくださいとほかなりません。残念なことに多くの震災助成が終了してしまいましたが、AFH はこれからも多くの応援者の皆さんとともに、被災地の命と心を支えるプログラムを届けていきたいと思います。活動継続のために多くの資金を必要としていますので、ご関心を寄せてくださいる方々にぜひこのレポートをご紹介いただけますようご協力をお願い申し上げます。



Media Coverage

2011

日付	メディア名	見出し／番組名
5.1	財団法人地域創造	アートで心を癒すプロジェクト「ARTS for HOPE」
5.21	日本経渷新聞	被災地と支援者結ぶ アート振興 NPO 機敏
6.15	『メセナ note 69号』	芸術・文化による震災復興支援を目指し、「GBFund (ジービーファンド)」設立
6.27	岩手日報	希望と笑顔結ぶ裁縫一大船渡 避難の子どもが挑戦
7.15	相馬市公式サイト	仮設住宅集会所でマスコットづくり体験
	福島民報	芸術で子ども癒やす—東京のNPO 南相馬と相馬訪問
7月号	『月刊フィランソロピー』	草の根的な被災地支援に取り組むNPOを応援—「nepia 東北地方被災地支援活動 支える人を支えよう!」
8.2	ラジオ福島	
8.14	朝日新聞	支えて、アートで復興—資金難 懈みは同じ
8.16	オレンジページnet	被災地の子どもたちに、はじける笑顔を—「ARTS for HOPE」の復興支援プロジェクト
10.30	朝日新聞「be extra」	生きる力 トヨタ応援
11.12	ラジオ福島	「夕焼けすとりーと」
12月号	『ソトコト』	社員ボランティアが被災地で出会った小さな笑顔

2012

2月号	『月刊フィランソロピー』	アートやものづくりを通して、子どもたちに笑顔とやすらぎの時間を提供
2.2	福島民報	シャボン玉の色、形 観察—南相馬アートプロジェクト
2.28	EARTH MOVEMENT	ARTS for HOPE
2.29	復興 釜石新聞	大きな紙にクレヨンで 園児らアート楽しむ
3月号	『ソトコト』	子どもから大人まで、アートを通じて夢中になれる時間を。
3月号	『月刊美術』	アートでのケアが生む、笑顔の連鎖
3月号	「文化芸術による復興推進 被災と支援の実態調査—子どもの心のケア コンソーシアム報告書」	
3.16	J-WAVE	「JK RADIO TOKYO UNITED」
3.26	福島民報	高度 15メートル空の旅 子どもたち笑顔—南相馬会場に「折り紙花火」
	相双ビューロー	こどもたちに笑顔を。夢気球・ARTS for HOPE
5.8	Think the Earth	被災した子どもたちにアートで笑顔と希望を届ける
	遠野まごろネット	ARTS for HOPE けせん朝市
5.10	ブルームバーグ	福島・南相馬：離散 150人が再会へ—希望と絶望の狭間で生きる
7.26	岩手日報	自然に包まれ創作活動—被災した児童ら 金ヶ崎でキャンプ
7.31	J-WAVE	「JAM THE WORLD」
8.17	徳島新聞	自作の歌で被災児応援—岩手「何度も訪ねたい」
8.24	静岡新聞	被災地児童がアート—御殿場で創作キャンプ 大自然も満喫
10.29	福島民報	人形作りに会話弾む
11.14	復興 釜石新聞	園児ら夢中でお絵描き—アートプロジェクト 色彩も明るく
11.29	福島コミュニティ放送 FM ポコ	
12.14	福島民報	クリスマスツリー描く—あすまでワークショップ

2013

1月号	『25ans』	創ることを通じて生きるパワーと心の元気を
1.22	福島民報	手でお絵描き子どもたち笑顔—東京のNPO原町でワークショップ
	福島民報	おもちゃかえっこ—「ポイント」を使い 小高工高実験、相馬署劇も

新聞・雑誌 ウェブ テレビ・ラジオ

日付	メディア名	見出し／番組名
1.31	南相馬ひばりエフエム	
2.22	福島放送	
2.26	福島民報	窓ガラスにお絵描き—原町の大賀幼稚園NPOが復興支援
3.13	ラジオ福島	
3.27	ラジオ福島	「おいしいラジオ」
3.29	J-WAVE	「JK RADIO TOKYO UNITED」
4.1	福島民友	熱気球体験に興奮—南相馬でイベント パーナの炎に驚き
	福島民報	幻想、気球5機に火—原町で復興イベント 紙の花畠に歓声
4.2	相双ビューロー	第2回のまおい夢気球プロジェクト
4.23	J-WAVE	「J-WAVE TOKYO MORNING RADIO」
5月号	『sesame』	被災地をお花畠に変えよう
5.31	福島テレビ	
6.3	福島民報	シャボン玉描き 園児笑顔—南相馬・高平幼稚園で「アート」体験
	福島民報	南相馬復興へ 絵で街明るく—プロジェクト始動 小学生ら思い思に描く
6.5	相双ビューロー	みんなのまちがびっくり大変身!
6.28	岩手日報	描く夢色無限の希望—大船渡 保育園児が創作体験
7.20	東海新報	アートキャンプ参加者を募集
7.28	NHKラジオ	
8.1	福島民友	全身を使いながら自由に“お絵かき”相馬の原釜幼稚園
8.14	ラジオ福島	
	南相馬ひばりエフエム	
8.16	福島民報	公園遊具明るく塗り変え—南相馬で東京のNPO
8.18	福島民報	被災地に咲く「希望の花」—原町の渡辺さん方 外壁 東京のNPO描く
9.9	福祉新聞	発達障害児「元の暮らし」へ
9.27	東海新報	色遊びに大喜び—アートワークショップ
	テレビ岩手	被災地の子どもたちをアートで元気に
10月号	月刊みんぱく	アートのちから
10.1	東海新報	アート拠点誕生—AfHが盛岡に支局開設
10.2	岩手日日新聞	アートで心のケア—NPOが市内でワークショップ 大船渡に支局開設へ
10.16	ラジオ福島	「かっとびワイド」
10.22	相双ビューロー	ARTS for HOPE 主催のアートリノベーション第3弾が行われました。
10.24	福島民報	遊具、トイレ色鮮やかに—東京のNPO原町の公園塗り替え
10.30	アーティスト×こども	日常を取り戻すアートから 未来を創るアートへ
11.8	相双ビューロー	相双“このひと”—『アート』にできる支援を再認識
11.10	河北新報「こども新聞」	みんなで大きな虹をかこう！顔にも絵の具をべたべた、なんて楽しい
11.15	相双ビューロー	相双“このひと”—「未来に思いを馳せる人々と夢を語り合える喜び」
11.18	福島民友	ワークショップ楽しい！人形作りに親子で挑戦
	福島民報	NPOが南相馬で遊具塗り替え
11.19	相双ビューロー	ARTS for HOPE 主催のアートリノベーション第4弾が行われました。
	福島民報	人形 上手にできた—原町で親子対象に「集い」
11.20	J-WAVE	「JAM THE WORLD」
11.22	相双ビューロー	相双“このひと”—「継続的なプログラムで子どもたちが 気軽に立ち寄り創作を楽しめるアトリエを」
12月号	セーブ・ザ・チルドレン	『セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンのあそびのレシピ』創作する遊び

ARTS for HOPE(アーツ・フォー・ホープ)について

所在地

東京本部	〒101-0021 東京都千代田区外神田6-16-5 外神田ミヤマビル 5F TEL : 03-6240-1525 / FAX : 03-6240-1528 / E-mail : artsforhope@gmail.com
岩手支局	〒022-0003 岩手県大船渡市盛町字木町 4-14 TEL : 準備中 / E-mail : afhiwate@gmail.com
宮城支局	〒983-0851 宮城県仙台市宮城野区榴ヶ岡5 (みやぎ NPO プラザ内) TEL : 080-5841-6989 / E-mail : afhmiyagi@gmail.com
福島支局	〒975-0031 福島県南相馬市原町区錦町 1-125 (ふくしまインドアパーク南相馬内) TEL : 080-5740-1771 / E-mail : afhminamisouma@gmail.com

<http://www.artsforhope.info/> facebook:ARTS for HOPE

運営体制

代表	高橋雅子(Wonder Art Production, Hospital Art Lab代表／アートプロデューサー)
運営委員	河津あつ子(三日月デザインオフィス代表取締役) 徳永恵美子(レンドリース・ジャパン株式会社) 若林朋子(プロジェクト・コーディネーター／プランナー)

アドバイザー	南 研子(NPO法人熱帯森林保護団体代表) Kay K. Lee(ビジネスサポート／日本語教師)
	渡邊奈々(写真家、ライター、アショカ・リーダシップ・グループ・メンバー) Cathy Malchiodi(Art Therapy Without Borders ディレクター) Paul Hogan(NGO Butterfly Peace Garden 代表)
	東京本部スタッフ 鈴木 唯 小松令奈 加藤尚 白石絢子 橋爪恭子 昆野祐希 岩手支局スタッフ 西條正夫 中村純代 久保田翔也 宮城支局スタッフ 佐藤文子 熊谷宣子 小関理 高橋里実 本郷由紀子 松本由美 福島支局スタッフ 折笠嘉子 小原風子 遠藤千春 斎藤ゆき

Special thanks	国内外のボランティア、ドライバーの皆さん
----------------	----------------------

ARTS for HOPE 活動の軌跡

March 2011 ~ 2013

監修 若林朋子(ARTS for HOPE 運営委員／プロジェクト・コーディネーター／プランナー)

発行日 2013年12月15日

編集 高橋雅子(Wonder Art Production / Hospital Art Lab / ARTS for HOPE)

発行元 ARTS for HOPE

鈴木 唯 (Wonder Art Production / Hospital Art Lab)

東京都千代田区外神田 6-16-5-501

小松令奈 (ARTS for HOPE)

E-mail : artsforhope@gmail.com

加藤 尚 (Wonder Art Production / Hospital Art Lab)

<http://artsforhope.info/>

橋爪恭子 (ARTS for HOPE)

助成 平成 25 年度みやぎ NPO 夢ファンド助成事業

©ARTS for HOPE 2013



ARTS for HOPE
Miyagi Japan

http://artsforhope.info/

29

30